「羅生門」の契機となった『今昔物語集』のテキスト

――『校註国文叢書』依拠説の否定――

宮田　尚

一　はじめに

「羅生門」は『校註国文叢書』（博文館）所収の『今昔物語集』にもとづいて構想、執筆したものではない、というのが本稿の立場である。

芥川龍之介が『今昔物語集』に取材した小説を書くにあたって使用したテキストは、三段階の推移を経ているとの見解を、わたしは先に示した。(注1) 三段階とは、つぎのとおりである。

1．最初の作品である「青年と死と」は、まず芳賀矢一纂訂の『攷證今昔物語集（天竺震旦部）』（冨山房）にもとづいたうえで、巻四第二十四話の類話として同書が掲げている『三国伝記』巻二第十九話に依拠した。

2．続く「羅生門」は、『改定史籍集覧（第九冊）』（近藤活版所）、『国史大系』（経済雑誌社）、『丹鶴叢書（下）』（国書刊行会）のうちのいずれかを用いた。ただし、現段階では、そのうちのどれであるかの特定は困難。なお、『校註国文叢書』は、少なくとも構想の段階では用いていない。

3．「鼻」以降の作品は、もっぱら『校註国文叢書』を用いた。

右の所見は、『今昔物語集』の受容史をたどる試みとして、刊本の発行時期を中心に観察して得たものだ。視点は『今昔物語集』の側にある。

ところで、この所見のうち（2）の後半部、すなわち「羅生門」の構想に『校註国文叢書』が関与していないとの部分は、じつは、芥川研究の側で定説化しつつあるかにみえる「羅生門」の成立時期の問題に抵触する。芥川研究の側では「羅生門」は、『校註国文叢書』にもとづいて書かれたとの前提で、構想、執筆時期を比定するのが一般のようだ。

したがって本来なら、競合する所説に言及しなければならないところだったのだが、前稿の掲載誌が企画物の公開講座論集であったためにそれを控え、わたしの立場を示すつぎの二点をあげるに

とどめた。

第一は、時間的な窮屈さだ。『校註国文叢書』と「羅生門」を掲載した『帝国文学』との発行時期の差は、およそ二か月。入稿の時期を勘案すると、実質的には一か月しかない。形式論理としては依拠が可能な時間差だが、実際問題としては、その可能性はきわめて低いと考えざるを得ない。そして第二は、「羅生門下書ノート」に記されている羅城門の規模に関する記述と、『校註国文叢書』の頭注とのずれの問題だ。

この二点の指摘で、『校註国文叢書』が「羅生門」の構想に関与していないとのわたしの立場は、基本的には表明できたと思う。

しかし、芥川研究の側の大勢にあらがうには、これだけでは必ずしも十分でない。既存の説の問題点もあわせて指摘しなければ説得力を持ちにくいし、主張も完結しない。そこで本稿では、前稿でふれることができなかった問題点を取り上げて説明責任を果たすとともに、自説を補強することにしたい。

念のために補足しておく。芥川研究の側の関心は、主として「羅生門」の成立時期にあり、その絞り込みの手段のひとつとして、テキストの問題が論じられている。わたしの関心はもっぱら、発想の原点としてのテキストにある。起筆や擱筆の時期は、付随する問題にすぎない。

二　『校註国文叢書』依拠説の展開

「羅生門」の『校註国文叢書』依拠説を提唱したのは、安田保雄だ。[注2] 安田はその論拠として、『校註国文叢書』の下巻が「羅生門」に先立つこと、「藪の中」の盗人名〈多襄丸〉が『校註国文叢書』の用字と一致すること、の二点をあげた。

これに対して森本修は、「納得し難い」と反論した。[注3] 盗人名の一致は『校註国文叢書』との間だけに認められる現象ではないから「例証とはならない」し、発行時期についても「あまりに近すぎる」と主張。そのうえで、「青年と死と」は『校註国文叢書』の発行に一年先立っているから、「博文館本以外に参看していたものがあった筈」と指摘した。全面否定だ。

たしかに、安田のあげた論拠には無理があるし、『校註国文叢書』依拠説では「青年と死と」の典拠について説明がつかない。『校註国文叢書』依拠説が成り立つためには、他の資料との併用が条件となる。

森本の批判を受けた安田は、不備を認めて自説の補強をはかった。[注4] 論の柱は三つある。第一は、盗人名に関する部分を撤回して、あらたにルビの一致を取り上げたこと。第二は、『校註国文叢書』依拠説の弱点である「青年と死と」の問題について、久保忠夫の論を取り込んだこと。[注5] 第三は、発行時期に関して「あまりにも近すぎる、ということは確かに問題である」と認めながらも、「反論の理由にはならない」と森本論を退けたこと。

安田の援用した久保論とは、「青年と死と」の典拠を、『仏教各宗高僧実伝』（帝国文庫）所収の「龍樹菩薩伝」だとするものだ。『校註国文叢書』依拠説のかたちは、これでひとまず整った。

この措置を受けて笠井秋生は、「もし、「青年と死と」の典拠についての安田説が認められるならば」と断ったうえで、次のように支持を表明した。

芥川と「羅生門」の素材となった『今昔物語』の原話との出会いは、大正四年八月刊の『校註国文叢書』本によってである可能性はきわめて高くなる。(注6)

笠井が安田論の支持を打ち出した背景には、「羅生門下書ノート」という画期的な新資料の出現がある。「羅生門下書ノート」は、それだけでも十分に資料価値が高いのだが、加えてその一部に漢詩の想を練ったメモがあり、石割透(注7)関口安義(注8)らによって、これが大正四年八月の松江旅行の印象を詠もうとしたものであることがあきらかにされた。

修正された安田論と、新出の「羅生門下書ノート」の研究成果とを総合した笠井は、右の見解からさらに踏み込んで、「羅生門」の成立時期を「八月末から九月にかけて構想され、遅くとも九月下旬には成立したと推定される」とした。

笠井論に見られるように、『校註国文叢書』依拠説と「羅生門」九月執筆説とは、分かちがたく結びついている。「羅生門下書ノート」の出現というあらたな事態を迎えて、『校註国文叢書』は起筆の上限を示す資料としての重みが増し、九月執筆説に欠かせないものになった。

九月執筆説は、「羅生門下書ノート」の全貌があきらかになる前にも、竹盛天雄によって提起されていた。(注9)「九月半ばから月末一杯ぐらいまでの間に仕上がったに違いない」との竹盛の推定は、新資料の出現によって裏付けられたかたちになった。

竹盛も、「羅生門」で使用した『今昔物語集』のテキストについては『校註国文叢書』をあげ、「この時期に改めて入手されたものと思う」としている。「改めて」というのは、「青年と死と」の問題を意識してのことだ。ただし、竹盛に「青年と死と」の典拠についての発言はない。

「羅生門下書ノート」の出現で、**『校註国文叢書』依拠説**、あるいは九月執筆説には、はずみがついた。**関口安義は「羅生門」の成立に関する竹盛論を、「執筆時期の核心に迫ったもの」と高く評価するとともに、笠井論の正当性を認め、「新資料の出現によって、「羅生門」の成立時期問題は、「一応の決着」がついたことになる」とした。**(注10)カッコ付きで「一応の決着」としたところには、なにか含むところがありそうだが、同じ著書の別の個所と、同じ時期に発表した別の著書(注11)とでは、「新資料の出現によって、近年ようやくその決着をみるに至った」と発言している。どうやら、真意はこちらにあるらしい。

以上が、『校註国文叢書』依拠説のおおまかな流れだ。

異論もある。「羅生門」の一応の脱稿を、大正三年の年末以前だとする海老井英次[注12]の立場は、とうぜん一連の『校註国文叢書』依拠説とはあいいれない。テキストに関する海老井の見解は、森本に近い。

三　安田修正論の問題点

『校註国文叢書』依拠説の原点である安田論は、右に述べたように森本の批判を受けて修正された。しかし、修正論も説得力に欠ける。

修正論であらたに取り上げられた論拠にふれる前に、修正を拒否した『校註国文叢書』と「羅生門」との発行時期の近さの問題にふれておきたい。

発行時期の近さは、安田論の根幹をなす。それだけに譲れない一線だったわけだが、彼自身が「あまりにも近すぎる、ということは確かに問題である」と認めているように、この論拠は弱い。

安田のいう「近さ」は、執筆期間の「短さ」と、いわば同義語だ。両者は裏表の関係にある。安田論にしたがえば「羅生門」は、八月二十九日発行の『校註国文叢書』下巻を手にしてはじめて『今昔物語集』巻二十六以下に接した芥川龍之介が、九月末までの一か月で読み、構想を練り、仕上げたことになる。主観に属することではあるが、信じがたい速さだ。

小さい作品だから短期間で書ける、というものではあるまい。ことに芥川龍之介は、作家としてスタートラインに着こうとしているところだ。自分を凝縮してアピールする必要もあっただろう。失敗の許されない緊張感の中で、慎重に作品を仕上げる期間として、一か月はいかにも短すぎはしないか。

こうした素朴な疑問は、安田論からおよそ二十年後に刊行された『芥川龍之介資料集』（山梨県立文学館）所載の、「羅生門下書ノート」の写真版を一見するとき、いっそうふくらむ。そこにとどめられている試行錯誤の痕跡は、「羅生門」が高揚した気分で、一気に書き上げられた作品ではないらしいことをうかがわせている。

もっとも、「羅生門」の取材、構想、執筆に要した期間を、一か月で十分だと見るか短すぎる見るかは、この段階ではまだ水掛け論の域を出ない。

しかしさいわいなことに、長短の論議に終止符を打つ鍵が、「羅生門下書ノート」に求められる。それによれば「羅生門」の執筆は、八月初頭にはすでに始まっていたことが知られる。『校註国文叢書』下巻発行のおよそ一か月前だ。とうぜんその前に、構想を練るなにがしかの期間があったわけで、「羅生門」の契機となった『今昔物語集』との出会いは、少なくとも七月以前でなければならない。具体的には後で述べる。

さて、修正論であらたに取り上げられたルビの問題は、依拠説の主張を支えうるのか。残念ながら、そうはならない。

「羅生門」でルビを付けようとすれば、『校註国文叢書』と同じ語が対象になるのはごく自然なことだ。『改定史籍集覧』等の三書には、もともとルビを付ける意思はない。方向性の異なるこれらと比較して、「羅生門」と『校註国文叢書』とがルビを共有していると指摘しても、何の意味もない。

問題にすべきはルビの有無ではなくて、その内容だ。安田が示している「引剥（ひはぎ）」（羅生門）「引剥（ひきはぎ）」（校註国文叢書）の例は、依拠説を支えるどころか、むしろ逆に「羅生門」を『校註国文叢書』から遠ざける方向に作用する。すなわち、盗賊を意味する「引剥」の用例は『今昔物語集』の五話に求められるのだが、『校註国文叢書』のルビはいずれも「ひきはぎ」。「ひはぎ」は、そこからはけっして立ち上がってこない。

「羅生門」の「引剥（ひはぎ）」は、おそらく同じ校註国文叢書の『宇治拾遺物語』（大正三年 1914 七月二日刊）から導入したものだ。『今昔物語集』の類話である第二七、二八、一七六の三話の「引剥」には、「ひはぎ」とのルビが付けられている。

さらにいえば、「引剥」に「ひはぎ」とのルビを付けたのは、校註国文叢書本『宇治拾遺物語』の創意による。『宇治拾遺物語』本来の表記は、「ひはき」。書陵部本、陽明文庫本等の写本でも、また無刊記古活字本等の版本でも、当該部分は一貫して「ひはき」と仮名で記されている。校註国文叢書『宇治拾遺物語』の「引剥（ひはぎ）」は、読者の便をはかって、底本である万治版本の「ひはき」に漢字を当て、本来の表記をルビにまわしたものなのだ。

こうした事実は、「羅生門」の「引剥」にルビを付けたのが芥川龍之介本人だとした場合、彼が校註国文叢書の『宇治拾遺物語』に親しんでいたらしいことを強く示唆する。しかし、「羅生門」と校註国文叢書本の『今昔物語集』とを結びつける例証としては、まったく機能しない。

修正論のポイントである「青年と死と」の典拠を「龍樹菩薩伝」（『仏教各宗高僧実伝』所収「三国七高僧伝図会」）だとする主張も、説得力を持たない。

「青年と死と」の典拠とされているのは、『帝国文庫』本で十七ページにもおよぶ長文の「龍樹菩薩伝」の、ごく一部だ。しかも、「龍樹菩薩伝」は「三国七高僧伝図会」の一部であり、さらに「三国七高僧伝図会」は『仏教各宗高僧実伝』の一部だ。

現在、わたしたちが典拠を探索しようとするときには、龍樹菩薩との手がかりがあるから比較的容易に当該部分にたどり着くことが出来る。けれども、芥川龍之介はそうはいかない。斜め読みであろうと拾い読みであろうと、とにもかくにも広い範囲に目を通さなければならない。芥川龍之介の知的好奇心の旺盛さと多読とは知られているが、彼はどのような意識でこの書を手にしたのだろうか。

ともあれ、この論が成り立つためにはまず、芥川龍之介と『仏教各宗高僧実伝』との接点が示されなければならない。そのうえ

で、『仏教各宗高僧実伝』に依拠しながら、「青年と死と」の末尾に、あえて「龍樹菩薩に関する俗伝より」と付記したのはなぜかについて、納得のいく説明がつけられなければならない（傍線筆者）。

「龍樹菩薩伝」は実伝を目指している。引用した典拠を、いちいち明示しているのはそのためだ。実伝を志向していることが明白な「龍樹菩薩伝」によりながら、ことさら「俗伝」だとした理由は何なのか。久保も安田も、この点については何の説明もしていない。

たしかに「龍樹菩薩伝」の当該部分は、『今昔物語集』巻四第二十四話と「青年と死と」との間に認められる不都合を吸収する。だが、その点でいえば、ほぼ同じ条件の類話が、大日本仏教全書本『三国伝記』の巻二第十九話にも求められる。刊行は大正元年1912八月で、「青年と死と」の二年前だし、一話の独立性という面からすれば、むしろこの方が「龍樹菩薩伝」よりもはるかに条件がよい。にもかかわらず、これを排除して「龍樹菩薩伝」を取る理由は何なのか。この点についても、納得のいく説明がつけられなければならない。

より類似度の高い資料へのアンテナを、絶えず張りめぐらせておくことは必要だ。だが、たまたまアンテナにかかった資料を、それまでに知られているものよりも類似度が高いというだけの理由で、あらたに典拠だと認定するのは危うい。『今昔物語集』の出典研究の歴史が、それを証明している。典拠と、そこから派生した文献との関係を解き明かすためには、両者を結びつける必然性が多角的に検討されなければならない。

結論的にいえば「青年と死と」の典拠は、前稿で述べたように『攷證今昔物語集（天竺震旦部）』所引の『三国伝記』だと、わたしは考える。『攷證今昔物語集（天竺震旦部）』所引の『三国伝記』を持ってくれば、「龍樹菩薩伝」を典拠と見なすことの障害となる右のような問題には、説明がつく。同じ『三国伝記』でも、大日本仏教全書所収のものでは「俗伝より」の部分への説明がつかない。

要するに、芥川龍之介の使用した『今昔物語集』のテキストを『校註国文叢書』だと認定したうえで、不足分を他の資料で補おうとする一元的な把握には、そもそも無理があるのだ。

四　「漢詩下書メモ」の示唆するもの

「羅生門下書ノート」に記されている漢詩の下書メモは、「羅生門」の執筆時期を絞り込もうとするとき欠かせない貴重な資料だ。証拠能力は高い。安田論の影響もあってか、芥川研究の側ではこれを九月執筆説の有力な証拠だととらえた。

しかし、わたしの解釈は違う。この「羅生門下書ノート」と、そこに記されている漢詩の下書メモは、「羅生門」の構想への着手が七月以前であり、したがって『校註国文叢書』依拠説を否定

する動かしがたい証拠だと考える。理由は、つぎの通りだ。

漢詩の下書メモは、指摘されているように、松江旅行の印象を詠もうとしたものだろう。芥川龍之介は八月二十二日の夜、田端の自宅に帰着した。二十三日付で発信した井川恭への礼状に、下書メモと同じではないけれども、題材や発想の通じ合う詩が書かれている。となるとこのメモは、井川恭への礼状のための草案として、二十二日の夜から二十三日にかけて記されたということになる。

そこで問題になるのが、下書メモの書かれた場所と書かれ方だ。『芥川龍之介資料集』所収の写真版「〈羅生門〉関連ノート9」によれば、「羅生門」の書き出しの案と見られる文章が八行分あり、そのページの後半部、つまり左側約半分のスペースに漢詩の下書メモは記されている。

気になるのは、字体の違いだ。浮かんだアイデアを一気に書こうとする手慣れた小説の下書と、平仄などを考えながら文言を模索する不慣れな漢詩とでは、書く速さも違うだろうし、とうぜん字体も変わってくるだろう。だが、そうした事情を勘案しても埋めきれない、もっとはっきりいえば、同じ日に書いたものだとは考えにくい差異が両者の間にはある。

思うに、この漢詩のメモは、小説の下書の余白に、後日書いたものだろう。両者の間にどれだけ時間差があったかわからないけれども、なにがしかの時間差があったことは、同じページに描かれている絵を介在させることで、はっきりする。

このページには、抱擁する裸の男女の絵が二面ある。これは小説の内容とも、漢詩の内容ともつながらない。おそらく、小説の案が行き詰まったとき、気分転換の手すさびに書いたものだろう。

それはともあれ、漢詩の下書メモの字配りが、この絵を避けるようになっていることに留意したい。それぞれの時間差は不明ながら、下書ノートの余白にまず絵が書かれ、さらにその余白を利用して漢詩の下書メモが書かれた、というふうに、段階を追ってこのページが埋められたことを、この字配りは示している。その逆はないだろう。

いわんとするところは、あきらかだろう。芥川龍之介が松江旅行から帰って礼状にしたためるべき漢詩の想を練った時点では、すでに「羅生門」の執筆は始まっていたのだ。

『校註国文叢書』下巻の発行は八月二十九日。松江から帰って、七日後だ。奥付に記されている日付より多少早く出版されることはあるとしても、芥川龍之介が松江旅行に出発した八月三日よりも前に、それも、それまでに構想を練る期間が取れるほど早く出版されるなどということはあり得まい。

「羅生門」への『校註国文叢書』の関与は、こうして否定される。起筆の上限をどこまで遡らせることが出来るのかはわからないけれども、「羅生門」の契機となった『今昔物語集』との出会いや構想への着手が、少なくとも七月以前であることは疑いを入

れない。

五　『今昔物語集』の残影

漢詩の下書メモが書かれたページに関して、確認しておきたいことがもう一点ある。このページに書かれている「羅生門」の草案は、「羅生門下書ノート」のなかで、もっとも古いタイプだと見られる点だ。

『芥川龍之介資料集』に掲載されている「〈羅生門〉関連ノート」十二点を、主人公の動向で分類すると、雨の中を羅城門に向かって移動するグループ（A）と、雨宿りのグループ（B）とに大別される。前者はさらに、雨中の移動時の様子を中心に記述したもの（A1）と、羅城門到着後の様子を中心に記述したもの（A2）とに分けられる。

雨宿りのBグループは羅城門の描き方に違いがあり、規模の大きさを記したグループ（B1）と、荒廃の様子にふれたグループ（B2）とに分けられる。死体の捨て場や、狐狸、盗人の栖家になったことにふれているのは後者だ。

A・Bの両グループは、主人公の呼称の面での区分とも、ほぼ一致する。すなわち、Aグループは「平六」「交野の平六」等の固有名詞を志向している。それに対してBグループは、固有名詞のほかに「一人の男」「一人の侍」等と、一般名詞で示す方向を模索している。やがてこれが初出の「下人」に収斂していくわけで、その意味からしても、Aグループの方が初期形態をとどめているということになるだろう。

右に述べたことを表にすると、次のとおり。整理番号は、「〈羅生門〉関連ノート」の番号である。

整理番号	主人公	主人公の動向	分類
⑨	平六	雨に濡れて羅生門へ　門を遠くから見る	A1
⑩	交野の平六	雨に濡れて羅生門へ	A1
⑪	交野平六	雨に濡れて羅生門へ	A1
⑫	交野八郎	雨に濡れて羅生門へ	A1
②1	交野平六	羅生門に到着後、袖を絞る	A2
②2	交野の平六	羅生門に到着後、袖を絞る	A2
②3	平六	羅生門に到着後、袖を絞る	A2
①1	交野の平六	雨宿り	B1
①2	×	×	B1
⑤1	一人の男	雨宿り	B1
⑤2	一人の男	雨宿り	B1

⑥	1	一人の侍	雨宿り	×	B1
	2	一人の侍	雨宿り	×	
⑧	1	交野の平六	雨宿り	石段に腰掛ける	
	2	×	雨に濡れて羅生門へ　門を外から見る	×	
③	1	一人の男	雨宿り	石段に腰掛ける	B2
	2	交野の平六	雨宿り	×	
④		一人の侍	雨宿り	×	
⑦		×	×	×	
帝国文学		下人	雨宿り	石段に腰掛ける	

なお、B1の羅城門の規模についての記述は、それぞれ次のようになっている。自分自身のための心覚えのメモだから、面倒な字や、分かり切った繰り返しの部分は省略している。

また、①に記されている「東西九間」は『校註国文叢書』頭注の「七間」と違っていて、『校註国文叢書』依拠説の反証となる。この点は、前稿でふれた。

①	1	南北二間三楹二丈、東西九間十　九丈
	2	南北二間三楹二丈、東西九間十　九丈
⑤	1	旧記によると南北　東西　と云ふ大きな楼門
	2	旧記によると羅生門は南北――東西――
⑥	1	旧記によると羅生門は東西――南北――と云ふ大きな楼門
	2	東西――　南北――と云ふ大きな楼門の屋根から
⑧	1	――の大門　大きな楼門
	2	大きな楼門

さて、漢詩の下書メモが記されているのは、⑨である。

主人公の平六は、考えごとをしながら雨の中を歩いている。彼の前に、雨に煙った羅城門が忽然と姿をあらわす。原文を引くと、つぎの通りだ（○は判読不能の文字。句読点をほどこした）。

平六に泥坊をしやうと云ふ意志があったのではない。

平六の考へがここまで進んだときに、目の前へ、雨の中からふうっと黒いものが現れた。平六は○をあげて、その正体を見きはめやうとした。その黒い物は、平六が足をはやめるのに従って、一足毎に、はっきりと、うすぐらい空に浮き上がって来る。高い楼が、雨にぬれてうす白く光ってゐるのが見る。(ママ)

はじめは、唯高い楼門の形が見えた。それから、屋根の瓦が

雨にうす白く光ってゐるのが見えた。最後に、羅生門と群青○金泥の三字を刻した広い扁額が見えた。所々妙に○ある白いものは、鳩の○かもしれない。平六は崩れかかった石段をふんで、やっと湿蟄の体を羅生門の家根の下に入れた。

平六が、はじめて羅城門を目にした場面、との設定だろう。「泥坊」うんぬんの語が用いられていることを含めて、これは摂津国から盗みをはたらく目的で上京した男を主人公にした『今昔物語集』巻二十九第十八話の世界そのままだ。これほど直截に『今昔物語集』を引きずっている例は、「羅生門下書ノート」の他の部分にはない。

典拠の世界を色濃くとどめているから書かれた時期が早い、とはかぎらない。しかし、内容が「帝国文学」掲載の形態からもっとも遠いことと重ね合わせるとき、その持つ意味は、やはり重い。

六　偶然の一致

『今昔物語集』の抜粋本は、芥川以前に三種類出ている。だが、それらには「羅生門」の原話は収められていない。

「羅生門」の構想、執筆に際して芥川龍之介が用いたのは、森本の指摘するように、『改定史籍集覧（第九冊）』（近藤活版所）、『国史大系』（経済雑誌社）、『丹鶴叢書（下）』（国書刊行会）のうちのいずれかでなければならない。

一点に絞り込めないのは、本文上に三書を分別できる異同がないからだ。『今昔物語集』はもともと、諸本間の異同が少ない。加えてこれら三書は、すべて丹鶴城主水野忠央の蔵本である丹鶴叢書を底本にした忠実な刊本で、底本に記された異本との校合も共有している。したがって、分別に有効な外部徴証が求められるまで、「羅生門」の契機となったテキストの特定は、留保せざるをえない。

はっきりしているのは、繰り返すことになるけれども、「羅生門」が『校註国文叢書』にもとづいて構想、執筆されたものではない、という点だ。

『校註国文叢書』上下巻の発行と「羅生門」の執筆時期とが重なったのは、単なる偶然だろう。

七月十四日に上巻が発行された時、「羅生門」の計画を持っていた、あるいはすでに計画を進めつつあった芥川龍之介は、巡り合わせを喜んで下巻の発行を待ったかもしれない。そして、入手した下巻にもとづいて最後の仕上げをしたかもしれない。本稿は、そうした可能性まで否定するものではない。

「羅生門」の起筆は、右に述べたように八月三日以前だ。松江旅行は、執筆を中断して出かけたのだろうか、それとも一応の完成を見てから出かけたのだろうか。いずれにしても、『校註国文叢書』下巻の発行された八月二十九日の時点では、生活に窮した一人の男と、同じような境遇の、他人を欺き、傷つけて生きていくほかない二人の女との絡みで展開する作品の骨格は、とうぜん

固まっていたと見なければなるまい。新刊の『校註国文叢書』にもとづいて、仮になんらかの手を加えたとしても、それはもはや周縁部の、いわば環境整備にとどまる。そう解釈するのが自然だろう。「羅生門」の契機となり、その執筆を促したのは、あくまでも右の三書のうちのいずれかなのだ。

「青年と死と」で踏み台にした『攷證今昔物語集（天竺震旦部）』にしても、「羅生門」で用いたテキストにしても、表記は『今昔物語集』本来の、漢字、カタカナ混じりだ。古典の〈常識〉とかけ離れた、一般にはなじみの薄いスタイルである。芥川龍之介が感じた『今昔物語集』への新鮮な驚きの中には、初見の時の視覚的な違和感も、なにほどか響いているかもしれない。

注1　芥川龍之介と『今昔物語集』との出会い（『芥川龍之介を読む』梅光学院大学公開講座論集　第五一集　笠間書院　2003.5）

2　芥川龍之介『「羅生門」』（明治大正文学研究　第五輯　1951.4）

3　・『羅生門』成立に関する覚え書き（国文学（関西大学）1965.7）
・羅生門（『芥川龍之介作品研究』八木書店 1969.5）

4　芥川龍之介の『今昔物語』（『比較文学論考　続篇』学友社 1974.4）

5　日本比較文学会シンポジウムでの発言（1970.10　注4論文による。後に活字化。「芥川龍之介の「青年と死と」の材源」東北学院大学論集(一般教育)　八二号　1986.3）

6　芥川龍之介「羅生門」(梅花短期大学研究紀要　三四号 1985.12)

7　『芥川龍之介』（有精堂 1985.2）

8　新資料『羅生門下書メモノート』・断片（国文学 1985.2）

9　羅生門（『芥川龍之介研究』明治書院 1981.3）

10　『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房 1999.3）

11　『「羅生門」を読む』（小沢書店 1999.2）

12　・『芥川龍之介論攷』（桜楓社 1988.3）
・幻の今昔物語集(新日本古典文学大系月報 65　1996.1)

【訂正】

芥川龍之介は、「今昔物語鑑賞」を発表して三か月後に他界した。前稿で、「「今昔物語鑑賞」が活字になったとき、芥川龍之介はすでにこの世の人ではなかった」としたのは、まことにうかつな誤りであった。